書 評

氏家 豊
東京電機大学 非常勤講師

社会調査における非標本誤差

吉村治正 編

東信堂
2017年
A5判，248ページ
3,456円

標本調査の場合は標本誤差が付きものである。しかし，調査における誤差は，標本誤差だけではなく様々な非標本誤差が生じ得る。

非標本誤差とは，本著において「人間によるミスという要因と調査実施の状況的要因の両方を含め，実際の社会調査が原則通りに進まないことで生じる，正確な情報からのズレ」と定義される。

数多くの社会調査を実際に手掛けてきた著者の経験に基づき，「非標本誤差をコントロールする技能が多少とも現場の人間の間で知覚されているものの，それが学問として自覚されていない」ことから，この「無自覚なノウハウをどのように意識表面にのせ体系化」することによって「非標本誤差を科学的研究の対象となし得るか」が本書の課題となる。

計算することができる標本誤差とは違い，誤差が生じる状況の多様さとその誤差の大小が数量的に把握できない非標本誤差は厄介な存在である。この本は，厄介な非標本誤差を小さくすることによって，正確な情報を得るための質の高い調査を行おうという提案でもある。

もとより調査者は，調査企画の段階で調査目的に合った調査方法であるか，その調査方法に適した調査対象の抽出方法であるか，調査対象に応じた調査日程であるかといったことなどを十分に検討しなければならない。また，正確な情報を得るためにはバイアスのない，すべての回答者に共通に意味が通じるような質問を作らなければならない。それでも非標本誤差は生じる。

本書が目指してきたのは「非標本誤差の俯瞰図を描くこと」である。様々な社会的制約が社会調査の結果に影響を及ぼすなかで，これらの影響を最小限にとどめるために行うこととして著者は以下の二点を挙げている。第一に，「調査の実施過程を詳細に把握し，個別の状況的制約がどのような影響を及ぼすかを事前に予測し，これに柔軟に対応し，原則として想定されている状態にできるだけ近接するように社会調査を管理すること」であり，第二に，「社会調査に人間が関わることで不可避に生じるミスや間違いといった問題を，社会科学の知識を持って可視化し，可能な限り予防していくこと」である。

本書の構成は，社会調査の誤差として考えられる「標本誤差」以外の「網羅誤差」，「非回答誤差」，「測定誤差」，「集計誤差」の４つの非標本誤差から成っている。

まず，抽出台帳の適合度に関する「網羅誤差」では，調査対象と抽出台帳とのズレに関して，抽出台帳のアップデートの処理について実際のデータをもとに説明がされており，どのように，どの程度の乖離が生じているのかが理解できる。

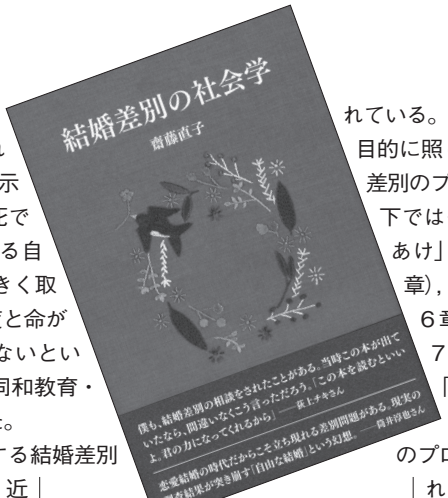
次に，調査における調査不能の問題に関して，「非回答誤差」を（1）回答率の低下，（2）回答率と偏りの関係，（3）非回答の理論という視点で具体的なデータをもとに調査の実状を示し，また，非回答を生み出す要因を探るべく非回答に関する代表的な理論を紹介している。

また，調査を実施するうえで生じる「測定誤差」に関して，（1）質問文に起因するもの，（2）調査員に起因するもの，（3）回答者に起因するものに分けこれまでの知見が広く紹介されている。

最後に，「集計誤差」については，ヒューマンエラーが発生する例として実際の集計作業でのコーディングにおける事例が紹介されており，さらに集計誤差を抑制する方向性が検討されている。

ネット社会において「あてにならない情報」が溢れていることに同調し，「あてにならない社会調査」が増えるようでは困る。本書は正確な情報を得るための質の高い調査，すなわち「あてになる調査」を行うための指針を授けてくれる。

内田龍史
尚絅学院大学総合人間科学部
教授



結婚差別の社会学

齋藤直子 著

勁草書房
2017年
四六判，312ページ
2,160円

結婚差別は，部落差別のなかでも最も厳しいとされてきた。その厳しさを端的に示す事例が，結婚差別による自死であろう。かつて結婚差別による自死は部落解放運動によって大きく取り上げられ，差別によって二度と命が奪われることがあってはならないという願いから，部落解放運動・同和教育・解放教育が大きく進展してきた。

では現在，部落出身者に対する結婚差別はどうなっているのだろうか。近年においても，被差別部落出身者を対象にした調査を見れば，結婚差別の事例は枚挙にいとまがない。しかし，結婚は極めてプライベートな問題であるため，詳細に調査・分析することが難しい。それゆえ，著者が述べるように「結婚差別問題が生じたとき，実際にどのようなやりとりがなされ，どのようなプロセスを経て容認に向かったり，あるいは破談に終わるのかという，結婚差別のプロセスに着目した研究はこれまでほとんどなかった」（ivページ）のである。

本書は，そうした難しさがありつつも，地道に結婚差別の当事者との関係を紡いできた著者による，結婚差別に関するインタビューをもとにした学術的かつ実践的な書物である。

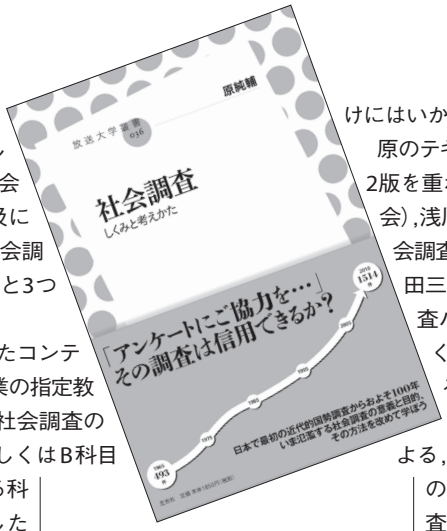
本書の目的は，「結婚差別問題が生じたとき，カップルと反対する親との間で，どのような対立や交渉や和解，あるいは決裂が生じるのかを描くことである。とくに，恋人たちがいかにしてその問題を解決していくのか，そのプロセスを丹念に記述すること」（iiiページ）である。

本書の構成（全10章）は以下のとおりである。まず，結婚差別を主題として取り上げる前提として，第１章「部落問題とは何か」で部落問題の概説と現状を示し，第２章「結婚差別はどのように分析されてきたか」で結婚差別に関する先行研究が整理されている。そのうえで，上述した本書の目的に照らし合わせ，第３章では結婚差別のプロセスの事例が紹介され，以下ではそのプロセスで生じる「うちあけ」（第４章），「親の反対」（第５章），「カップルによる親の説得」（第６章），「親による条件付与」（第７章）の各章を配置し，第８章「結婚差別問題では何が争われているのか」では，これらのプロセスの総合的な分析が行われている。第９章「結婚後差別」では，結婚差別を「乗り越えた」後，新たに形成された家族の中で生じる差別問題が取り上げられている。最終章の「支援」（第10章）は，結婚差別を受けた人々に支援を行っている人，結婚差別に直面した経験者へのインタビューから得られた，結婚差別に対応するためのヒントがちりばめられている。

本書の学術的な意義を述べておこう。結婚差別は，結婚（配偶者選択）という家族社会学が主たる対象とする領域であるにも関わらず，部落差別問題が研究対象として取り上げられることは稀であった。本研究は，理論的な前提として配偶者選択論を掲げており，差別研究と家族社会学研究の接合が目指されている。性別役割を前提とした家族のあり方が，さらには情報化社会において差別の表出形態が大きく変動するなかで，本書を嚆矢として，両者を接合するさらなる研究の発展が望まれる。

「部落差別なんていまだにあるの？」という人から，今まさに結婚差別に直面している人まで，幅広く本書が読まれることを願うと同時に，多くの人にとって見過ごされがちな人々の経験を丹念に描こうとする社会学者の研究成果が，手に取りやすい書物として出版されることの重要性を示してくれる一冊である。

吉川 徹
大阪大学大学院人間科学研究科
教授



社会調査

しくみと考えかた

原 純輔 著

左右社
2016年
B6判, 256ページ
1,998円

社会調査についての書籍は, 近年大幅に数を増している。これは, 社会調査協会の社会調査士資格制度の普及によるものだろう。そうした社会調査関連の本は, 大きく分けると3つに分類できる。

第一は資格科目で指定されたコンテンツを手際よくおさえた, 授業の指定教科書である。これはA科目（社会調査の基本的事項に関する科目）もしくはB科目（調査設計と実施方法に関する科目）の全15回の講義を想定したものが多い。いずれも規定の事項を論じるなかで, さまざまな話題を取り入れる工夫がなされている。

第二は, そうした資格科目の参考図書として位置づけられるものである。授業を担当する者にとっては, 正しい学説, さまざまな先例, 最新の動向, 統計解析の基礎を手早く教える「引き出し」を多く持っていることは重要である。おそらく科目担当者は, それぞれが自分だけの「ネタ」をもっているのではないかと思う。受講生にとっても, 授業で触れられない深い知識を求めて, より専門性の高い参考図書を読むことは重要である。そうしたニーズに答えるのが, 社会調査の詳細な知識を教える教本（ハンドブック）である。その最たるものが,『社会調査事典』（丸善出版）であろう。

そして第三に,「社会調査とは何か」, あるいは日本の社会調査のメインストリームはどこにあるのかを論じる定番本というべきものがある。本書はここに位置付けられる書籍であろう。

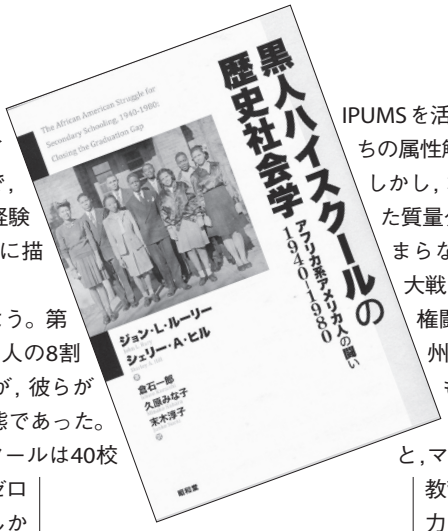
本書内では執筆の経緯として福武直の『社会調査』（岩波書店）に触れているが, その福武直, そして安田三郎以来の日本の社会調査の本流を語るとき, 本書の著者である原純輔の名前を挙げないわけにはいかない。

原のテキストといえば,海野道郎との共著で2版を重ねた『社会調査演習』（東京大学出版会）,浅川達人との共著で同じく2版ある『社会調査』（放送大学教育振興会）, そして安田三郎のテキストを受け継いだ『社会調査ハンドブック 第3版』（有斐閣）がよく知られている。評者の世代からみると, 現代日本の社会調査の基礎を築いた人だといえる。本書は原による, その名も『社会調査』という決定版のテキストである。現代日本の社会調査の正統な本流を示す書籍だといえるだろう。

ところで佐藤健二の『社会調査史のリテラシー』（新曜社）は, 往年の社会調査の定番本である安田の『社会調査ハンドブック』の年代ごとに変遷する各版の内容が異なることを挙げ, 日本の社会調査教育の歴史を論じている。評者は,原の社会調査論についても,同様の社会調査史研究ができるのではないかと考えつつ本書を読んだ。

内容を紹介しよう。本書は6章構成である。そのコンテンツは,「社会調査の性格と用途」,「調査票と面接調査」,「標本と母集団」,「集計・分析・報告」,「さまざまな社会調査」,「社会調査の現在」となっている。順序良く社会調査の基礎の紹介が進められるが,そのなかでとくに,なぜランダム・サンプリングが重要なのか, 個別訪問面接聴取法の有効性, どうして回収率が低くなっているのか, 統計的推測の基礎, 新しい技法の位置付けなどについては, 原の見解が明示されており, 強調すべき事項にメリハリがつけられているのが読者の関心をそそる。他方で, 原自身が主導した調査のデータが随所で例示され,かつ旧来のテキストで示されてきた,ホーソン実験,ギャラップ調査,アメリカ兵の例なども適切な語り口で示され,これもたいへん参考になる。多くの社会調査士諸氏に,ぜひ一読を薦めたい。

松田素二
京都大学大学院文学研究科
教授



黒人ハイスクールの歴史社会学

アフリカ系アメリカ人の闘い1940-1980

ジョン・L・ルーリー
シェリー・A・ヒル 著

倉石一郎・久原みな子・末木淳子 訳

昭和堂
2016年
A5判，344ページ
3,240円

本書は，20世紀前半のアメリカに出現した黒人ハイスクールの軌跡をたどることで，人種隔離を乗り越える闘いの経験とその先にある困難を実証的に描いた労作である。

まず内容を簡単に追ってみよう。第一次世界大戦前，アメリカの黒人の8割は南部の農村に居住していたが，彼らが享受する中等教育は悲惨な状態であった。900万の黒人に対してハイスクールは40校足らずで，深南部にあってはゼロという絶望的な状況だった。しかし第二次大戦期になると劣悪な設備・教育環境ながら黒人ハイスクールが誕生し多くの若者をひきつけた。この傾向は戦後更に加速する。人種統合を警戒する白人リベラルの支持も得て，「平等化」政策によって黒人ハイスクールに公費が投入され，施設・設備の著しい改善がはかられた。だがこうした「分離すれども平等」路線は，1960年代に入ると破綻し，公民権運動の盛り上がりのなかで南部も含めた全米で「人種統合」路線が開始される。1970年代後半は，こうした人種隔離撤廃が最高潮を迎えた時代だったが，現実には，人種隔離に「失敗」した白人の多くが学区を去り，黒人が多数派になった居住区で新たな人種隔離が誕生することになった。

本研究は二人の研究者（教育史学者と社会学者）の共同作業の成果だが，社会調査の観点からみると二つの大きな特徴がある。

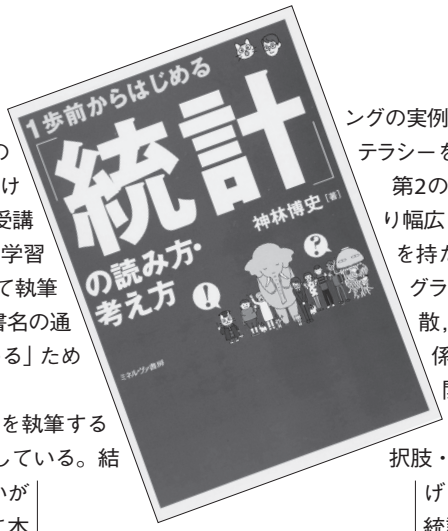
第一は，社会調査の方法をめぐる定番の問題意識である，質的調査と量的調査の接合についてである。かつては両者がそれぞれの長所と短所を補完しあい，バランスのよい調査を行うという「正解」が喧伝されていた。本書のなかでいうと，例えばかつて黒人ハイスクールに通っていたアフリカ系アメリカ人の膨大な「語り」は質的調査の成果だろうし，IPUMSを活用したハイスクールの生徒たちの属性解析は量的調査の成果だろう。しかし，本書の最大の魅力は，こうした質量分析の併存による記述にとどまらない。この分析結果を第一次大戦，戦間期，戦後大衆社会，公民権闘争の時代というアメリカ合州国の20世紀の大変動によるものと位置づけ，変化を理解しようとする〈歴史学的視点〉と，マイノリティにとって望ましい教育とは何か，そこにおける学力達成の意味は何かを問い続ける〈教育学・人間学的視点〉とがみごとに融合している点で，平板な質量調査併用論を乗り越えている。

第二の示唆は，社会調査における実践的志向についてである。近年の社会調査において，公共社会学志向と連動して，対象に対する調査（者）のコミットメントが肯定されることが多い。そこでは，かつてのような対象に対する「デタッチメント（中立・客観）」志向とは別個の，「アタッチメント（愛着・没入）」による実践が強調される。本調査においては，声高なアクティビズムとは一線を画するものの，アフリカ系アメリカ人の若者を周縁化してきた教育制度や社会意識に対する批判と改革の意志が，冷静な記述のなかに明快に表明されている。

本研究が論じた問題点，とりわけ，マイノリティの教育にとって，マジョリティとの統合教育のもつ意味（マイノリティの自律的連帯のもつ意味）は，今日においてこそ深く検討されるべき重要な課題である。黒人ハイスクールについての「語り」は，黒人の教師のもとで黒人の学友と過ごした時間の貴重さを回顧させる。その分析は，2007年の連邦最高裁判決（シアトルのハイスクールにおける人種統合制度を違憲と判断）の評価とも関係するだろう。

書 評

都村聞人
神戸学院大学現代社会学部
准教授



1歩前からはじめる「統計」の読み方・考え方

神林博史 著

ミネルヴァ書房
2016年
A5判，340ページ
2,376円

本書は，統計リテラシーの入門書である。大学のカリキュラムにおける位置づけとしては，社会調査士科目を受講する前に統計的思考の基礎を学習する授業のテキストを想定して執筆されている。その意味では，書名の通り統計学を「1歩前からはじめる」ためのテキストといえよう。

著者は，「あとがき」で本書を執筆するにあたっての3つの狙いを示している。結論から言えば，この3つの狙いが見事に実現されていることに本書の魅力がある。

第1の狙いは，統計やデータに「だまされないこと」よりも，統計やデータの読み取りや提示ミスにより，「自分が間違えないこと，（自分のミスによって）他人をだまさないこと」を読者に伝えることである。著者はまず，「統計情報を正しく理解し，そこから得られた情報を他の人や社会に伝える力」である「統計リテラシー」が，21世紀の新しい「市民的教養」になると指摘する。統計リテラシーを身につければ，仕事の道具として「自分のためになる」だけでなく，「証拠に基づいた議論」の重要性を認識し，それに基づいた政策決定をすることにより「社会のためになる」と説く。そして，統計が信頼できるかどうかを判定するチェックポイントとして「6W4H」に着目することを勧める。つまり，データに接したときに，「誰が，誰を（対象に），なぜ，いつ，どこで，何を，どのように（調査対象の選び方，調査の方法，質問の方法，ケース数）」調査したかを確認することが重要だということである。統計の信頼性に関する具体例は豊富に提示されており，例えばブータンの「国民総幸福量」の根拠となった調査の問題点など，興味深い事例が紹介されている。第14章では，「若者の海外旅行離れは本当か？」という問いを立て，証拠に基づいた議論のトレーニングの実例を示し，読者が実践的に統計リテラシーを高める方法を提示している。

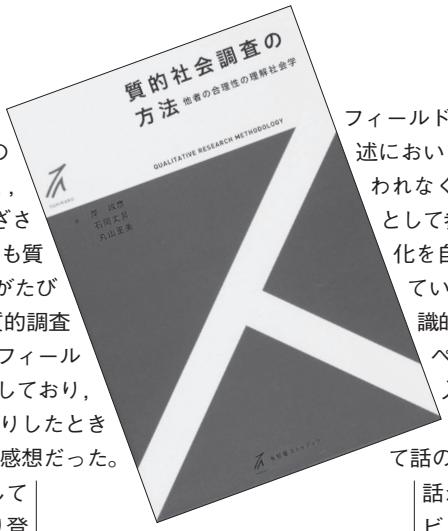
第2の狙いは，「扱う内容を可能な限り幅広くすると同時に，内容に体系性を持たせる」ことである。本書では，グラフの基礎知識，平均，代表値，分散，標準偏差，相関関係と因果関係，第3の変数と疑似相関・媒介関係，母集団と標本，無作為抽出法，推定と誤差，質問文・選択肢・質問方法の基本などがとりあげられている。こうした内容は，統計の入門書として系統的であり，読者は偏りなく学ぶことができる。また，全15章が興味深い具体例をもとに工夫されて執筆されているため，大学の15回の講義で体系的に指導することが可能である。

第3の狙いは，「読んでいてわかりやすく，楽しい本にしたいということ」である。本書は可能な限り数式などを用いずに，統計の本質が理解できるように工夫されている。多様な分野の実証研究を行い，社会調査教育の経験も豊富な著者が実際に講義を行っているような柔らかい文体とユーモアは，加藤美紀氏の猫を中心としたかわいいイラストと調和しており，初学者でも楽しく読みやすい。また，各章には，「Check」，「本章のまとめ」などの囲み記事があり，ポイントが理解しやすい。そして，各章の「練習問題」も適切に作成されており，教員は学生に思考力を育む課題を課すことができる。

以上のように，本書は統計の入門書として，データの基礎を学びたい大学生，高校生，社会人，統計をわかりやすく指導したい大学教員，高校教員などにお勧めの1冊である。それだけでなく，著者の社会調査に関する豊富な知識が盛り込まれた「注」には，興味深い情報が多く，初学者以外も改めて学ぶべきことが多いと考えられる。

書 評

矢吹康夫
立教大学社会学部 助教



本書は，初学者向けに書かれた質的社会調査の教科書である。「読んで面白く，現場でも役に立つ」ことがめざされており（iiページ），本文中でも質的調査の「魅力」や「醍醐味」がたびたび強調されている。私も質的調査についての講義科目や学生をフィールドに送り出す演習科目を担当しており，教員の立場で困ったり迷ったりしたときに使えるなというのが初読の感想だった。著者たちがこれまでに指導してきた学生・ゼミ生がときおり登場してはいい役回りを演じてくれているのだが，初学者が陥りがちな思い込みや不安や葛藤をほぐして，気負わなくても大丈夫だと背中を押してくれる教科書である。

たとえば，どこかから借りてきた理論や概念を，つい事例にあてはめてしまう初学者の気持ちは，社会学的に意味のあることを言わなければならないという怯えからきているように思う。だが，それに対しても本書は，まずは面白さを先に置き，いかにしてそれを社会学的に意味あるものに昇華していけばよいか教えてくれる。既知のものの捉え方で事例を見るような「ゴシップ的な面白さ」では，他者は結局不合理なままに描かれ，調査者のもっている常識を補強するだけで終わってしまう。そうではなく，自身の常識をくつがえし，ものの捉え方をバージョンアップしてくれるような他者の合理性に迫ることができた調査研究が，「社会学的な面白さ」を獲得し，代表性はなくとも十分に社会学的に意味のあるものになりうるのである（103-105, 118-119ページ）。

このように著者たちは，それぞれの「経験則」をもとにしながら具体的な技法や視点を示してくれる。いくつか要約すると次のようなものである。

質的社会調査の方法
他者の合理性の理解社会学

岸 政彦
石岡丈昇
丸山里美　著

有斐閣
2016年
A5判，272ページ
2,052円

フィールドでの振る舞いや研究成果の記述において中立性や客観性に過剰に囚われなくてもよい。それよりも，何者として参与したのかというカテゴリー化を自覚し，どのような主観をもっているかという調査者の構えに意識的であることが大切である（70ページ）。こうした調査者の先入観や思い込みをくつがえすような新しい語りは，往々にして話の支流や脱線，関係のない世間話から生まれるのだから，インタビューの場を統制しすぎる必要はない（209ページ）。また，誰がやっても同じ結果が得られるという近代科学が前提とする信頼性には固執せず，「あなた自身にしかできない」という固有性が奨励される（93ページ）。複数の視点を超越したところから俯瞰して「多様な解釈がせめぎあっている」程度のことを言うくらいなら，調査者がどの視点から事例を見ているのかという「バイアスを公言」し，自己言及的な記述によって透明性を担保すればよい（113-114ページ）。

このように本書では，従来の実証主義的な社会調査観においてはやってはいけないと禁止されそうなことも推奨しており，初学者を迷いや怯えから解放してくれるのだが，かといって奇をてらっているわけではない。個人の生活史を歴史と社会構造のなかに位置づけ直すことをとおして（227-229ページ），一見して不合理な行為の背景にある他者の合理性を記述・説明し，そこで得られた理解を人びとと共有する。そうすることで自己責任論を解体するのが質的調査に立脚した社会学のひとつの目標とされており（33-34ページ），社会学的想像力の発揮という点ではむしろ王道をいく教科書なのである。